メロンブックス限定購入特典
桜と向日葵
サラリーマン流
高貴な幼女の護りかた
1

「殿下は、ヘイゾーのどこが好きなんですか？」

「……？」

裂海優呼の言葉に、日桜は首を傾げる。

「……わたしはさかきを、すき……なのですか？」

「えっ、自覚なし？」

優呼は驚きの声を上げる。

「だって、膝枕をしてあげたんですよね？」

「……はい」

「それなのに、好きじゃないんですか？」

「……ははうえから、とのがたにはひざまくらと、うかがいました」

「皇后様から？」

「……はい」

頷く日桜に、今度は優呼が首を傾げる。

「じゃあ、殿下は労うために膝枕を？」

「……はい」

「それじゃあ、ヘイゾーのことは好きじゃないんですね？」

「……わかりません」

答えに窮するかのように、日桜が眉根を寄せる。

「……そもそも、すき、とはどのようなもの、ですか？」

「そ、そこから？」

日桜は立ち上がると、部屋の片隅にある本棚から百科事典を持ち出し、優呼の前に来るとページをめくる。

「……すき、とはこころひかれること、とあります。また、かたよってこのむこと、ともあります」

「殿下はヘイゾーに心惹かれたんじゃないですか？」

「……このましいとおもいます。ですが、すきかどうかは、わかりません」

気軽な問いだったはずなのに、何故か面倒なことになっている。

優呼は自分が焦れているのが分かった。

「ええっと、好きっていうのはその人のことを考えたり、一緒に居たいな、って思うことですよ？」

「……かんがえることは、あります。いっしょにいて、おはなし、したいです。それがすき、ですか？」

迂闊だった。日桜は感情が乏しすぎて恋愛にまで至っていない。

いくら誘導したところで優呼が期待した答えにはたどり着きそうにない。

「じゃあ、私がヘイゾーと一緒に居たら殿下はどう思いますか？　もやもやしませんか？」

「……ゆうこと、さかきが、ですか？」

日桜は視線を宙に泳がせ、小さな眉間にしわを寄せて考える。

焦れったいことこの上ない。

「……もやもやは、しません。ゆうこもさかきも、だいじ、です」

「そ、それは光栄なんですけどね。私が言いたいのはもっとこう、具体的なもなんです！」

妙に力が入る。

考えを伝えることがこんなにも難しいとは思いもしない。

「一緒にご飯食べたいなーとか、一緒に遊んだら楽しいだろうなーとか、考えません？　そういうのが好きっていうんですよ！」

「……さかきと、いっしょにごはん、たべています」

「うっ！」

「……あそぶというのは、なにをしますか？」

「ううっ!?」

ダメだ、言語は通じているのに持っている価値観が違いすぎる。

優呼自身もかなり厳しい環境で育ったという自負はある。

幼いころから剣術を学び、寝るときも刀を抱いていたほどでも、日桜には及ばない。

優呼も刀から離れる瞬間があって学校の友人と遊び、テレビを見ては笑った。なのに、今の日桜にはそれがない。

「……いっしょに、いるだけでは、だめですか？」

純粋な瞳に射貫かれ、優呼は次第に言葉を失う。

お手上げだ。

「申し訳ありません。少し意地悪をしました。私はてっきり、殿下がヘイゾーのことを好きなんだと思っていましたから」

「……ごめんなさい」

「いいえ、謝ることではありません。私のわがままです」

日桜なら応援できる。優呼は心のどこかでそう思っていた。

好きという言葉を聞けば、自分が抱える心の靄を吹っ切れるとも考えていた。なのに、自問自答する羽目になってしまった。

「殿下、じゃあこれから少しずつ考えていきましょう。好きっていうのは楽しいものですよ？」

「……ゆうこも、さかきをすきなのですか？」

「へっ？　私がですか？」

「……ゆうこは、さかきのことをはなすとき、とてもたのしそう、です」

「そ、それは……！」
「……わたしはさかきがすき、です。ゆうこも、さかきがすき」
「で、殿下！」
「……ちがいますか？」
「違います！　だって、ヘイゾーはまだ仕官したばかりですよ？　それに剣術だってへっぽこだし、お腹だってふにゃふにゃなんですよ？」
「……このままえかちました。おなかは、これからきたえれば、よいだけです」
「くっ、正論ばかり」
「……ゆうこも、こころひかれたのですね？」
諭すような日桜の言葉に、優呼はそれ以上続けることができなかった。
「殿下が一言好きと仰っていただけたら、それで済んだんです！」
「……よくわかりませんが、ふたりがひとりをおもっても、よいのではないですか？」
「それ、後悔しますよ？　あとから独り占めはダメなんですよ！」
「……かまいません」
日桜が優呼の手を取り、胸元へ引き寄せる。
幼女と少女の語らいは当分終わりそうになかった。

『サラリーマン流 高貴な幼女の護りかた①』